

# 養護教諭の職務における求められる力量の形成 ー連携力からコーディネート力の構築へー

大野 泰子

## The Formation of the Proficiency on the Duties of the Yogo Teacher

- From a Cooperative Power to the Construction of the Coordinate Power -

Yasuko ONO

### (Summary)

As for the solution to contemporary health problem, the cooperation is demanded among various specialized agencies. On this cooperation, the school nurse is appropriate for the coordinator in the school, because of having specialized knowledge, flexibility, and the potential of cooperation with various agencies.

However, it is thought that the prospect of educational affair is driven into the invisible situation with spending most of their time into the health management in the school, and lack of understanding of other school staff.

Of course, the health management is basic duties.

On the other hand, the original coordination of school nurse is demanded for solving a health problem on the cooperation with other agencies, through the practice of health room management.

The coordinator will perform important role in not only the special support education, but also the promotion of school health education.

I think all school nurses have to concern about it as a necessary role, and to consider about how to improve proficiency and interchange, together.

キーワード：学校保健、コーディネート力、研修保障

Key Words : School health, Coordinate power, Support training

### はじめに

養護教諭の職務について、2008 年中央教育審議会答申は画期的な提言がなされ、今日的な「学校保健活動の推進における中核的役割をもつ」とした役割が明記されて後 3 年を経過しようとしている。しかし学校保健において中核的な役割を示すに至っては、「連携」の言葉は必ずと言

ってよいほどどの研究においても書かれているが、その連携のチームアプローチをどのように展開するのか重要なコーディネーターの役割については十分語られていない。また、先行する「特別支援教育」における「コーディネーター」は存在するが、「学校保健」における「コーディネーター」は学校現場においては養護活動に意識変化が現れていないように思われる。

そこで、求められる力量としての「コーディネート力」を構築するためには養護教諭はどのように意識化していくのか、文献並びに養護教諭研修会における記録から考察を行なった。

## 1. コーディネート力とは

### 1・1. 求められるコーディネート力

コーディネートとは「ものごとを調整しまとめること」、コーディネーターは「調整する役割を持つ人」と訳される。コーディネーションは「関係者間での事前の協議にもとづく調整のこと」であり、情報と時間がかかるとも大辞林に書かれている。

日本養護教諭学会では2007年養護教諭の専門領域に関する用語集<sup>1)</sup>において、「コーディネートは、個人や組織等、異なる立場や役割の特性を引き出し、調和させ、それぞれが効果的に機能しつつ、目標に向かって全体の取り組みが有機的、統合的に行えるよう連絡、調整を図ることである。このような役割を持つ調整役をコーディネーターという。」と定義している。また同用語集では連携について、「多様な分野の個人や組織が、同じ目的に向かって、異なる立場でそれぞれの役割を果たしつつ、互いに連絡を取り、協力し合ってものごとを行なうことである。」と定義しており、コーディネートは連携をさらに推し進め、全体の取り組みを有機的に、統合的にと表現され、目標に向かって調整すると書かれている。

心の健康問題が多発してきた頃の1997年保健体育審議会答申において、すでに養護教諭の「調整能力」の期待が明記されており、学校保健の要としてコーディネーターを担うことが求められていた。2008年の中央教育審議会答申では、一層の関係者間の連携推進が必要であり、養護教諭はコーディネーターの役割が求められている一に至っているのである。

今日的な複雑化している児童生徒の健康問題の解決には、教職員、学校三師、保護者のみならず、関係機関のそれぞれの役割や機能を十分に発揮させ、組織的効果的に協働して取り組むことが求められ、その中核に養護教諭が存在がある。

### 1・2. 米国の学校保健コーディネート力の育成

津島らは<sup>2)</sup>2006年大学の短報で、我国では学校保健コーディネーターの存在が重要であるといった指摘にとどまり、コーディネーターそのものに関する研究は少ない現状があり、学校保健の分野においてもコーディネーション機能が明確化されておらず、技能を習得するためのプログラム開発についても模索の段階にあると述べている。

そして米国における学校保健コーディネーター養成プログラム<sup>3)</sup>を論文で紹介している。

米国では60%の癌が子どもの時代から始まる行動（生活習慣）と関連していること、学校が子ども達にとって最も組織化されたシステムであることの2点より、米国癌協会(ACS:American

Cancer Society) が「癌のリスク削減は学校保健から始まる」と述べ、1977 年に講習会において学校保健コーディネートを目標に学校現場でのコーディネーターの役割を明確化することを通達した。1990 年には ACS 協会長が学校保健を最優先コアとしコーディネータートレーニングに着手、1998 年「学校保健コーディネーター講習会」を各州に公募し、1999 年開催された。

講習会プログラムの目標は、ケア・コーディネーションの必要性を意識化し、全体像を理解することである。細目標は①自分の活動を意識化し、アセスメントする。②自分の地域の状況を明確にする。③援助者としての自分の態度、傾向に気づく。④ケア・コーディネーションの概念と手法について理解する。その一例の内容は 2 週間の講義演習、技法の講習を前期とし、3 カ月のフィールドワークの後、課題の報告会や達成度の検討などを中心に後期講習 2 日のプログラムで構成されている。また学校保健コーディネーターは①専門的な準備と保障、②学校保健計画のコーディネートを計画・実施・評価できること、③地域社会資源に精通し、州や保健・教育機関とのつながりをもっていること、この 3 つの技能を備えているべきとしている。

さらに学校保健コーディネーター研修会<sup>4)</sup>の紹介では、以下の成果と改革の技術開発の指標を設けている。

成 果	1	学校保健計画を推進するための組織化された機能する能力を示すこと
	2	学校保健計画の実践的指導者であるために必要な技能を示すこと
	3	計画状況を確認し、評価する複数の戦略を使う技能を示すこと
	4	学校保健推関係者に対し、動機付け・教育をする能力を示すこと
	5	学校保健推進のための経済的資源の開発と総合的プロジェクトへの管理能力を示すこと
指 標	1	参加者は学区内で、明文化された正規の地位があり、コーディネートする時間確保ができるような、学校保健コーディネーターの地位を確立すること
	2	学校保健計画のコーディネートプログラムを支持し、地域学校保健協議会を設置し、促進すること
	3	全ての生徒が健康に対する知識を持つことを目的に、質的な保健教育に向けて構造改革できるような、学校を基盤としたリーダーシップチームを作る上げること。それにより地域における学校保健教育プログラムを強化すること

第 1 回の講習会の参加者の教育レベルは、15%が学士、70%が修士号、5%が博士号、5%が他の高度の学位保持者であった。経歴は 37%が教師、37%が健康教育担当者、21%が看護師、5%其の他であった。また学区リーダーから許可されたメンバーであること、3 年間の講習会に参加し、学区内の学校保健コーディネーターになることが義務付けられていた。講習会の継続から、コーディネーション機能の遂行技能を 10 項目挙げている。

- ① 計画立案、②アセスメント、③調整会議、④権利擁護、⑤管理、⑥実行、⑦社会資源  
⑧財政運営、⑨訓練、⑩評価

経年化に伴い学校保健コーディネートに必要とされるリーダーシップ技能の理解が増し、参加者の地位の確立は 2002 年においては 68%が完全に確立したと答え、さらに高まりつつある。米国のスクールナースは保健師が担っており、地域保健における癌予防を学校保健に取りこんで行う素地があると考えられる。

### 1・3．養護教諭のチーム援助に関するコーディネーション

我国では、1991 年に地域保健分野において訪問看護・在宅ケアの実践の中でケア・コーディネーターの必要性が指摘され、介護保険法において介護支援専門員（ケア・マネージャー、ケア・コーディネーター）が高齢者福祉対策として、先行で存在する。1991 年新津ふみ子<sup>5)</sup>により訪問看護分野でケア・コーディネーション研究所が設立され、研修を実施している。

学校現場においては医療的ケアを必要とする児童生徒の支援に対し、養護教諭は健康に関する問題の学校内外の窓口役（調整役）として複数の専門職のチームワークを支える役目を行っており、さらに特別支援教育におけるコーディネーター係りとして、養護教諭が公務分掌を引き受けている学校も増えてきていると聞く。

秋光恵子らは<sup>6)</sup>、学校内のチーム援助における養護教諭のコーディネーション活動と養護教諭の職務満足度に及ぼす影響において岐阜県の調査結果から以下の考察をしている。

養護教諭は「こどもの心身の状態把握」においてコーディネーション行動を援助チーム内で中心的な役割を担っているが、小中学校においてコーディネートの中心的役割は生徒指導担当者が担っていた。心の問題に対する継続的な支援において、養護教諭が積極的にチーム援助に関与することが、問題の早期対応が可能になるなら、コーディネーション行動は一層期待されると述べている。養護教諭の職務満足感においては、個別のチーム援助よりも、恒常的・継続的な学校全体に関するコーディネーション活動が満足感の影響が強かったことから、全体に関わる積極的な「教育相談」があげられている。しかし、かかわるための体制の構築やコーディネーション能力・権限が不十分であると反対に悩みとなってしまう。学校内の継続的な活動を通しての実践力の向上はもちろん、健康相談活動における「コーディネーションについての研修」機会を積極的に持つことが自身の満足感の上昇にもつながると述べている。

## 2．養護実践におけるコーディネート力について

### 2・1 学校現場の養護教諭

2011 年養護研修会において、参加者を 6 人ずつ 4 グループ校種別に分け、「養護教諭のコーディネート力を発揮できない理由」について個人の意見をシートに書き KJ 法により分類してまとめ、グループ討議を行なった。

< 1 グループ >

考え方の相違	どの子にどんな支援が必要なのか職員に温度差がある 担任、管理職、学校支援サポーターの方との考え方の相違
5	特別支援に対する考え方に温度差がある

専門的な知識 (子どもの理解)	<p>教職員の理解</p> <p>教育相談、スクールカウンセラーとのかかわりをどのようにしていくのか</p> <p>一人ひとりが子どもを見る視点が違う</p> <p>苦しんでいる生徒の行動を問題行動ととらえる職員もいる</p> <p>支援を必要とする個のタイプの理解</p> <p>専門知識が必要なケースが多くなってきている</p> <p>様々なタイプの子どもがいるので様々な接し方対応が必要</p> <p>症状や行動が多様なため</p> <p>子どもが困っているのか苦しんでいるのかなまけているのかわからない</p> <p>何が子どもにとっての必要な支援なのか把握する（不登校・学習面）</p>
10	
家庭	<p>保護者の理解不足、2</p> <p>専門的な判定や助言を受けることを保護者がこばむ</p> <p>保護者との連携</p>
5	家庭の問題が大きいので先生方の指導だけでは良くならないので
支援体制	<p>職員が支援のことを理解していない、研修不足</p> <p>教科学習では専門的な知識がないと指導が難しい</p> <p>支援を必要とする子どもと養護教諭の関わり方</p> <p>学校全体の支援体制、組織がない2</p> <p>職員の研修時間が足りず子どもの支援のことを理解されていない</p> <p>対象者が多く十分サポートができない（人手不足）</p> <p>個々で対応はしているが連携ができていない、組織にならない</p> <p>校内のどの委員会で考えていくのか、全て養護教諭の判断になっている</p> <p>自分自身が支援についての勉強が必要</p> <p>学校全体をまとめていく力量</p> <p>個別対応していく教室、教員が不足しているので計画が立てにくい2</p>
13	コーディネーターに力が足りない
他機関の連携	<p>どこに相談してよいかわからない</p> <p>他機関との連携について、関係機関との連携(病院・福祉支援室)</p>
4	支援が必要な子どもの早期発見にどのようにかわるか
子どもの様子	学校に出てこない
多忙	<p>養護の職務が多い</p> <p>会議が多くて関係者が集まりにくい2</p> <p>先生方が忙しくて話をする時間がない2</p> <p>共通理解の場である校内研修での時間確保が大変(短い結果の伝達が主となっている)</p>
6	

< 2 グループ >

問題点	目標値がはっきりしない（小・中・高と講習が切れてやりにくい） コーディネーターを必要としていない 考えがまとまらず迷っている 修正しようとしてもプランはなかなか上手くすぐ修正はできない 計画はほぼ一人で立てることになりやすい傾向にある
5	
学校の体制	忙しくて時間がない2、職務の多忙さ、来室児童の対応のため、 雑務の多さ、他に仕事が多くて忙しく、なかなか力を入れられない もっている公務分掌がたくさんあるので コーディネーターの仕事が理解しにくい、共通理解説明に時間がかかる 学校内の経験不足（コーディネーターがいないのでわからない） コーディネーターといわれても立場が弱い時は年下だから実行しにくい
6	
校内連携	コーディネーターと管理職の間に意見の差がある 他の教職員の考えによること、担任の理解2 教師の協力が求められないと実行できない、校内連携5 相談することができない 管理職の理解不足
10	
教師側の実態	健康課題の分析が十分されていないので、コーディネートしにくい 計画の結果が見えにくいものが多く、計画案が立てにくい 教員のリーダー性の不足（平等に進めてきたので、リーダーが苦手） 力量不足、知識不足、経験年数8 特別支援は担当の方がいるのでより詳しく知っている コーディネーターをしていく上で学習の機会がない。 いまで一杯。コーディネートする自信がない。
14	
子どもの実態	子どもの実態把握不足 全体のコーディネートより今日の前にいる子(保健室の子)を大切にしたい 子ども一人ひとりは見られるが、全体を見ることができない。 課題を持つ児童の多様化
4	
地域	専門機関、外部の情報不足どこと連携できるか、専門機関との連携の難しさ、 外部の連絡、調整、三師の協力不足、連携の難しさ4
8	
保護者	保護者の協力が得られない

< 3 グループ >

企画力不足、 提案力不足	他の学校行事との関係で予定が立てにくい3 時間が取りにくい（下校時間・少人数教育など）、日程調整など2
-----------------	--

10	<p>事前準備不足、実施計画を作成するのに時間がかかる 2</p> <p>役割分担するのが難しい 2</p> <p>計画、提案の仕方</p>
職員の意識が低い 12	<p>担任と養護教諭の意識の差がある、職員の共通理解 6</p> <p>担任との時間調整</p> <p>健診中の保健室来室者の対応など、校内で話し合いが行われていない 3</p> <p>担任の先生がしっかりしていない</p>
職員との連携不足 7	<p>健診の受け方等の児童への指導</p> <p>事後処理、治療勧告を配布しても受診につなげられない 2</p> <p>健診結果通知を渡した時の保護者の意識、事後措置の理解不足 2</p> <p>健康診断を受けることができない発達障害の子ども対応が難しい</p> <p>欠席者、不登校、などのもれ者対応が担任との連携により円滑に進まない</p>
養護教諭の意識 6	<p>積極性が養護教諭に足りない</p> <p>養護教諭が仕事を抱えこみ過ぎている</p> <p>評価を行ない次年度に生かすこと</p> <p>養護教諭が一人しかいない</p> <p>発想の転換がない、マンネリ化 2</p>
医療機関との連携不足 4	<p>健康診断の家庭通知内容が校医により異なる場合がある</p> <p>校医の日程調整 3</p>
教委・管理職意識	<p>健診器具が少ない</p>

< 4 グループ >

校内・保護者 14	<p>校内の情報共有の難しさ（管理職・担任・教職員・養護）</p> <p>子どもの様子を分かち合う、雑談が大切</p> <p>保護者との連携が難しい 5</p> <p>積極的な情報発信</p> <p>皆の理解を得られるための働きかけにパワーが必要</p> <p>校内でも話し合う時間、情報交換の時間が取れない 3</p> <p>様々な職種間の立場を理解し調整しなければならない</p>
関係機関 3	<p>管理職を活用する</p> <p>様々な外部阻止区との連携</p> <p>相談機関や関係者と連絡がなかなか取りにくい</p>
知識・情報	<p>仕事内容が把握できていな、知識情報不足 2</p> <p>コーディネーターの役割がはっきりしない</p>

6	特別支援への専門的知識に乏しい 自分自身に特別支援に対する理解と実践が不足しているとやりにくそう 職員室での子どもに関する雑談が大切。
3	養護教諭自身 校内の少数派であるがため、なかなか理解が得られにくい 近くに一緒に取り組んでくれる人がいない 少数派は全部お任せになりがち
3	実態把握困難 研修が学力向上に偏り、時間が取れていない 実際に子どもとの関わりが少ないので支援計画を立てにくい 児童生徒の現状の把握

## 2・2. コーディネートを難しくしている理由

コーディネート力という言葉から発想される事柄は、特別支援教育を意識した内容に関するイメージがどのグループも多く出されていた。

- 1 グループ：専門的な知識（10）、支援体制（13）、多忙（6）
- 2 グループ：教師側の実態（13）、校内連携（10）、地域連携（8）
- 3 グループ：職員の意識が低い（12）、提案力不足（10）、職員との連携不足（7）
- 4 グループ：校内・保護者連携（14）、知識情報（6）

コーディネートする養護教諭側の問題として、専門知識情報不足と提案力、連携力、余裕なしが挙げられた。学校教職員の問題として、専門知識の共有不足のため職員の意識が低い、支援体制ができていないため連携できないなどが挙げられた。また各グループではこのことから、以下の方策が出された。

- ① コーディネーターとして、時間確保のため学校行事の精選をする
- ② 共通理解を行なうために個人の資料や情報をわかりやすいものにして全体に提出する
- ③ 校内体制を作りその中にコーディネーターを位置づける
- ④ コーディネート研修を深める
- ⑤ 教職員間の情報交換の場や時間を位置づける
- ⑥ 保護者へアピールのためのおたより作成
- ⑦ 地域関係機関を把握する
- ⑧ 特別支援委員会の機能の充実を図る
- ⑨ 積極的に関わる
- ⑩ 具体的な関わりの統一

## 3. 考察とまとめ

### 3・1 コーディネーター研修の充実

平成 20 年中央教育審議会答申において、養護教諭の職務と役割に関する記述では、学校内外



の連携、または医療福祉関係の連携を推進するコーディネーターの役割が養護教諭にあると提言されている。

2009 年大野<sup>7)</sup>は、「学校保健コーディネーターとしての養護教諭」において保健室経営の調査から、養護教諭自身・管理職・教諭の立場で養護教諭の執務を振り返り学校保健の推進役を考えた。その中で養護教諭自身の自己採点の辛さから多忙な執務内容が伝わり、反面教諭や管理職が執務内容に協力的であることから、保健室経営をコーディネートすることが養護教諭の執務の充実につながると考察した。

2010 年全国養護教諭連絡協議会第 17 回研究協議会のフォーラムの場で後藤<sup>8)</sup>は、関係する人たちの専門性を活かす取り組みが必要になり、その際に養護教諭自身が自分の専門性に自負をもつことが重要である。そのためには、日々の仕事を計画的に進めて評価し研鑽を重ねる‘自己教育の力’と様々な場面での対応を振り返って経験地を深める‘省察の力’が求められる、と述べている。

健康相談活動における他機関の支援コーディネートはもちろんであるが、健康教育においても目的により担任や体育教師、校医・歯科医師・薬剤師・栄養教諭などと連携しながらその發揮する場をコーディネートする力が肝心であり要であるといえる。

米国における学校保健コーディネーターの育成研修は参考となるところが多く、我国においても同様な研修が期待されるところである。

しかし短期大学養護教諭養成校において、教育としてコーディネート力の概説はできても実践化に結びつく力量をつけることは難しいと考える。2011 年日本養護教諭学会において養護教諭養成カリキュラムの変更が提起され、さらに時間をかけて身に付ける「新しい教育科目」にマネジメントやコーディネートに関する教科の設置が議論されつつあるのは、歓迎することである。しかし、本来コーディネート力は実践の中でこそ構築していく力量である。現職者対象の経験 10 年目研修において、養護教諭にステップアップの資格として育成プログラムにのっとりコーディネーター資格を獲得し、地域の拠点校に指導的立場を持つての配置や、複数配置校などが執務上の理想であろうと考える。そして研修プログラムの受講者は高い志を持って参加し、ヘルスプロモーションの理念は生涯の健康を展望する学校保健のコーディネーションにより初めて構築を可能とすると考える。

研修会における意見としてまとめた各養護教諭の考えは、「養護教諭のコーディネート力を發揮できない理由」は、執務に対する教員間の理解が未だ不十分であることが出されていた。文部科学省の今後の対応として、20 年中央教育審議会答申の書かれている環境整備や法制度の整備が、学校保健における養護教諭の中核的な活動を保証する学校保健コーディネーター研修プログラムの実践を期待したいと考える。

現場においては様々な学校保健の実践があり、困難な状況であるからこそ研修の希望をもつ意見が多数あり、コーディネート資格を制定し、研修の実施が今後重要であることが示唆された。

## おわりに

健康教育や健康相談活動において、養護教諭の立ち位置が明らかになったが、一人職種であるゆえに経験の浅い養護教諭にとっては現実的な職務の実施に結びつかない。養成カリキュラムの改正に賛同するが、経験者研修におけるステップアップの構造化を行なう研修に期待したい。米国の公衆衛生と教育の連携した健康教育の充実の施策展開は参考となることが多く見られた。養護教諭職 70 年の節目に至る今日、養護職務内容が変化する兆しを現実のものにぜひしていきたいと考えるのである。

## 参考・引用文献

- 1) 日本養護教諭学会、(2007 年)、養護教諭の専門療域における用語解説集、
- 2) 津島ひろ江、小出やよい、江里口ゆかり、(2006 年)、我国と米国の学校保健コーディネーター養成と習得プログラム、川崎医療福祉学会誌 Vol. 16 No. 1 P141～150
- 3) Scott W, Steve D and Beth S: Training Leaders for School Health Programs : (2004) The National School Health Coordinator Institute. Journal of School Health, 74(3), 79-84,
- 4) Judith Mo ,Greg S, John CT, Mark R and Beth S: (2004)、Evaluation of the Nationsl School Health Coordinator Leadership Institute. Journal of School Health, 74(5). 170-175,
- 5) 新津ふみ子、ケア・コーディネーション研究所 :  
[http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/rehab/r088/r088\\_033.html](http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/rehab/r088/r088_033.html)
- 6) 秋光恵子、白木豊美、(2010 年)、チーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感に及ぼす影響、教育心理学研究、58、34-45
- 7) 大野泰子、(2009 年)、学校保健コーディネーターとしての養護教諭、鈴鹿短期大学紀要、第 29 巻、119-131
- 8) 後藤ひとみ、(2011 年) 学校尾保健活動推進において中核的役割を果たす養護教諭の資質能力とは一変革の時代において求められる養成教育のあり方を加えて、全国養護教諭連絡協議会、瑞祥第 7 号 P166